あの茜色の空を見上げて

イズナ/泉中

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夕日が空を茜色に染め上げたとき、少女達は出会う。

目次

Eins 1
Zwei 7
Drei 15
Vier 26
Fünf 34
Sechs 38
Sieben 46
Acht 53
番外編
IF story：BanG Dre am! 7th Live! Part 1 62
IF story：BanG Dre am! 7th Live! Part 2 71
IF story：BanG Dre am! 7th Live! Part 3 78

Eins

「駄目っ！あなた、この子に何をするつもりなの!?」
「どけっ！こいつがいるから、俺は…！」
ここはとある山の奥地にある川の橋の上。目の前でお父さんとお母さんが言い争っている。お父さんが縋り付くお母さんを振り払い、怒りの表情を浮かべながら大股で私の元へ歩いてくる。
「お前なんて、いなければ…！」
そう言って、強い力で私の腕を掴み橋の手すりまで引き摺っていく。
「お父さん！もうやめて！」
「そんなに喧嘩しないでぇ！」
私の二人の姉がそう言ってお父さんに縋り付く。それを無理矢理引き剥がしたお父さんは私の身体を持ち上げ――――
橋の上から私を放り投げた。

「…え？」

少しの浮遊感の後落下の感覚が私を襲い、橋から身を乗り出した家族の姿が急速に遠くなっていく。

そして――私は激しく流れる川へと落下した。落下の衝撃を感じたと思ったら、次の瞬間には莫大な水が私を飲み込んだ。

「がほっ……！た、たすけ…」

溺れまいと必死に水を掻き、水面へ顔を出す。が、周りに流れている水によって直ぐに水中へと引き戻される。

もはや自分の身に何が起きているかもわからない。わかるのは、自分が水の中にいること。そして――

自分が、捨てられたという事。

その事実を認識した瞬間、私は絶望した。
溺れまいと必死に動かしていた手足の動きが止まる。それと同時に、さらに激しくなった水の流れが容赦なく私の身体を沈めていく。
このままいけば私は溺れ死ぬだろう。生きるために少しでも水面に上がらなければならないのに、私の身体は動いてくれない…いや、動かせないというべきか。
薄れ始める意識。それと同時に浮かんできたのは、大切な姉たちの笑顔。
（ごめんね…姉さん達）
二人の姉の笑顔を思い出しながら、私は静かに目を閉じる。

薄れゆく視界の中、最後に見えたモノは激しく流れる水のみだった。

「母さん、今日のご飯なにー？」
「今日のご飯は…沙綾の好きなチーズをハンバーグに乗せよっか」
「やったー！」
嬉しそうにはしゃぐ自分の娘を見ながら、私は空を見上げる。
時刻は夕方、天気は快晴。今まさに沈み続けている夕日が、空を茜色に染め上げている。オレンジ色の夕日が作り出す影を眺めながら、ふと川岸へと目を向けて――――
――私は目を疑った。
突然歩みを止めた私を不思議に思ったのか、沙綾が私を首を傾げている。だがそれも意識に入らないくらい、私は驚愕していた。
川の中央、小さな中洲が存在するその場所に人が倒れている。

それが少女であると認識した瞬間、私は沙綾を置いて走り出していた。
「母さん!?」
私は土手を駆け下り、川の中へ躊躇迷い無く入っていく。ここら辺一体の川は浅いと知っているからだ。
川の中に踏み込んだ私の靴やスカートの裾が水に濡れていくが、そんな事気にしていられない。
中州にたどり着き、少女の側に駆け寄る。抱き起した少女は気を失っているようだ。
「沙綾、救急車呼べる!?」
「わ、わかった!」
川岸まで追いかけてきた沙綾に救急車を呼ぶよう頼み、私は少女を見る。
歳は沙綾と同じくらいだろうか?アイスグリーンの髪に、端整な顔立ち。身長はおそらく沙綾より少し低い。顔色はかなり悪く、呼吸はしているものの苦しそうだ。
「大丈夫!?しっかりして!」
少女に声をかけ続けるが、目を覚ます様子はない。早く病院に連れて行ってあげたいのだが、いかんせん私は身体が弱く、ここから少し距離のある病院まで運んであげられるほど体力が無いのだ。
(とにかく、川岸まで運ばないと…)

私は意識の無い少女を背負い、再び川を渡る。
「母さん、その子は…」
「呼吸はしているわ。でも意識は無いし、ずっと水に浸かってたみたいで体も冷たいから、早く病院に運ばないと…」
沙綾がしっかりと呼んでくれたのだろう。遠くから救急車のサイレンが聞こえてくるのを感じながら、私は少女が無事であることを願い続けた。

Zwei

少女を見つけてから2日。
結論から言うと、少女は無事だった。
長い間水に浸かっていた事による低体温症、流されている間にあちこちぶつけたと思われる打撲以外には命にかかわるような怪我は無く、意識こそ戻ってはいないものの命に別状はないとのことだった。
「よかった…」
先生からの説明を聞いていた私は静かに息を吐く。
現在私は病院にやってきている。少女の身体検査が終わったとの報告を受けて、慌ててやってきた形だ。
少女はいつ目を覚ますかわからないが、あと数日以内なのは確実らしい。
「それにしても、この子はよく無事でしたね…先日の大雨で川が増水し、かなりの勢いで流れていた中で流されて生きていられるなんて奇跡的ですよ」
「この子の親は今頃何をしているのでしょうか?この子の親も突然いなくなった娘を心配しているはずですよね…」

「…恐らくですが、この子の親は探しに来ないかと」
「どういうことですか?」
私が恐る恐る聞き返すと、先生は一瞬悲しそうな表情を見せ話始める。
「この子の身体には、恐ろしい数の青痣がありました。それに加えて、鋭利な刃物で切られたような傷もいくつか見受けられました。更に、この子の服に付着していた水草なんですが…」
先生が静かに地図を出して私に見せてくる。
「この水草、山奥を流れる川などにしか存在しないんです。もちろん、水草自身が流れてくる可能性もありますが、かなり確率は低い。そうなると、この子はこの場所で川に落ちて流されてしまった可能性が非常に高いんです」
「そのことと、探しに来ないことに何の関係が…?」
「本来、この川周辺はかなり足場が不安定で誰も川の側に降りられないようになっています。つまり、川に近づいた際に誤って転落した…わけではなく、橋の上などから落ちたと見るべきです。加えて、この子の身体についているいくつもの暴力の痕…もうおわかりですよね?」
「そんな…まさか」
もし私の考えが当たっていたとしたら…この子はどれ程の心の傷を負っているのだ

ろうか。

そう考えていた私に、先生は苦虫を噛み潰したような表情でこう言った。

「…この子は親から虐待を受けていて、つい先日に川に捨てられた可能性が非常に高いです」

足元が大きな音を立てて崩れていく感覚。私は言葉を失った。

二日後、少女が目を覚ましたとの連絡を貰い、家族全員で病院へ向かうことにした。

「ここが彼女の病室です」

病院についた私達家族5人を迎えてくれた先生は、すぐさま病室へと案内してくれた。

「彼女とは私もまだ会話しておりません。ですので、どのような言動をとるかわかりませんが、落ち着いて話を聞いてあげてください」

先生の言葉に私達は頷く。

「それでは…入っていいですよ」

先生に促され、病室のドアを開ける。目に映ったのはベッドの上から窓の外をぼんや

りと眺める少女の姿だった。
「こんにちは」
「あの…誰、ですか?」
私達が入ってきたことに気付くやいなや、怯えた表情で全身を緊張させながら恐るといった風に問いかける少女。
「この人は君を助けてくれたんだよ」
先生が少女にそう言うと、少女はいくらか安心したように体の力を抜いた。
「私は山吹千紘。貴女の名前は?」
とりあえず名前から聞こうと思い、質問を投げ掛ける。たが少女は信じられないような言葉を口にした。
「…茜。それ以外は、何も思い出せないんです」

少女——茜はどうやら記憶喪失らしい。川に流されている間に頭を強く打った可能性があるとのこと。そのせいで何も思い出せなくなっているらしい。

先生と話し合った結果、茜が退院したあとは児童養護施設等ではなく、私達山吹家で引き取ることになった。親元もわからないし、わざわざ捨てた娘をもう一度拾いには来ないだろうと思ったからである。

だが問題が一つあった。それは…茜の心の傷が深いこと。

記憶を失っても、その身に刻み込まれた恐怖は消えてくれないらしい。――『男性恐怖症』。私の夫である亘史を始めとする大人の男性が近づくだけで震えだし、涙を零すのだ。こればかりは時間をかけてでも、少しずつ慣らして行くしかないのだろう。

そして――カウンセリング等で大幅に予定が遅れること1ヶ月。茜の退院日の今日、迎えに病院までやって来た私と沙綾を待っていた茜は、私達の姿を見ると僅かに表情を笑顔に変えてこちらに近づいてきた。

「おはよう、茜。準備はできてるの?」

「おはよ、茜」

「おはようございます、千紘さん。沙綾もおはよう。準備はもう終わってます」

「なら先生に挨拶してから行きましょう」

そう言って先生の元へ向かい、今までの感謝を伝える。

「先生、今までありがとうございました」

「お世話になりました」

「いえいえ、茜さんと仲良くなれてよかったですよ」
そう言って茜の頭を撫でながら、優しく微笑む先生。目を細めて嬉しそうな表情をする茜。傍目から見れば、親子のようにしか見えない。
「山吹さん、茜さんをよろしくお願いしますね」
「…ええ、もちろんです」
…本当に優しい先生だ。この人が茜の担当医でよかったと、心から思えるくらいに。

先生と別れ、私が運転してきた車に乗り帰路に着く。
車の中では緊張しているのかほぼ無言の茜を気遣う様に、沙綾が優しく話しかけている。この1ヶ月、学校や家の手伝いをこなしながらも、時間が空けば病院へ向かい話をしていた沙綾と茜は随分と打ち解け、仲良くなったように見える。
沙綾と話を振ってくれたお陰で幾分緊張が解けたのか、少しずつ話始める茜。心なしか表情も柔らかくなった気がする。
ミラー越しに娘達の会話を眺めながら、私は車を走らせる。しばらく経ち、私達は借

りている駐車場に到着。車を止め、家へと歩き出す。
「さあ、着いたわよ」
「…」
また緊張がぶり返してきたのか、表情の固くなった茜の手を掴み、家の中へ。
「ただいま」
「お父さん、ただいまー」
「お帰り、二人共…じゃなくて〝三人共〟だったね」
「今日からお世話になります、茜です。よろしくお願いします、亘史さん」
「ははは、そんなにかしこまらなくて大丈夫だよ、今日から君は家族なのだから」
「あ、茜姉ちゃん！」
「茜お姉ちゃん！」
奥から飛び出してきた純と紗南が、茜に抱きつく。病院にお見舞いにいった回数こそ少ないものの、すっかり懐いたらしい。
「ひゃ…!?純くんに紗南ちゃんか…よろしくね？」
「ほら二人とも、茜がびっくりしてるから気を付けて」
「ん…別に大丈夫だよ、沙綾」
「そう？ならいいんだけど…」

よかった、これなら心配は無さそうだ。早くも打ち解けた子供達を見て、私は素直にそう思った。

Drei

私、山吹茜は記憶喪失だ。12歳以下の記憶が綺麗さっぱり無くなっていて、どのような事があったか思い出せない。更に私は捨て子だ。気が付いたら病院にいて、目の前に沙綾と千紘さんがいた。病院にどういう経緯で運び込まれたのかも覚えていないし、思い出そうとしても思い出せない。当然身寄りなどなく一人だった私を引き取ってくれたのが、千紘さんだったわけだ。

だから私の本当の苗字は「山吹」ではないし、この家の人たちと血が繋がっているわけではない。

それでも――私に対して本当の娘のように接してくれた千紘さんと亘史さんには感謝している。それに、いつでもそばで支えてくれていた沙綾や純くん、紗南ちゃんの事は本当の家族のように想っている。それが唯一記憶が無く、自分の事が何一つわからない私の本物の想いだった。

ゴポゴポゴポ…

何かに引っ張られるような感覚と共に、私の身体は暗い水底に沈んでいく。

肺の中の酸素が足りなくなり、呼吸もままならなくなる。焦って必死に水を掻くが、残り少ない酸素をより一層浪費するだけ。段々と手足の動きが緩慢になっていく。

明確に感じる死の恐怖。それを後押しするかのように、周りはどんどん暗くなっていく。

そうこうしている間に到達した水底で、私の意識は薄れていき――

「嫌あぁぁぁぁ！」

突然響き渡った絶叫に驚き跳ね起きる。慌てて辺りを見回し、その絶叫が自分の発したモノだという事に気付いた私は、大きなため息を吐く。

壁にかけてある時計を見れば、現在時刻は午前４時３０分。カーテンの隙間から細く差し込む光が私の部屋を照らす中、私は自分のベッドの上で恐怖に震える身体を抱いていた。

「――また、あの夢か…」

そう呟いた私の言葉は、誰にも届くことなく虚空へと溶けて消えていった。

私は自身の冷や汗でびしょびしょになった寝間着と着替えを持って浴室へ向かう。この家の人たちを起こさないように、静かに音を立てずに廊下を歩く。

浴室に到着し、直ぐに寝間着を脱いでシャワーを浴びる。浴び終わるとタオルで身体の水気を取り、着替えの服を素早く着るとそのまま浴室を出て、リビングへ。

リビングへ向かうと、既にこの家の大黒柱である亘史さんが起き出していて慌ただしく準備をしていた。ちなみにこの家は「やまぶきベーカリー」というパン屋を営んでいて、商店街で人気のパン屋である。

「おはようございます、亘史さん」

「おはよう茜、早速だけど手伝ってくれるかい？」

「わかりました」

亘史さんに返事をして、開店準備を手伝う。商品棚を布巾で拭いて、店内の床をモップで掃除する。その間亘史さんは売る商品の準備だ。お互い無言で作業を続ける。そして数十分後、粗方掃除を終えた私に亘史さんが声をかけてくる。

「悪いけど、まだ寝ているかもしれないから沙綾を起こしてきてくれるかい？」

「了解です。表札はひっくり返して大丈夫ですか？」

「お願いするよ」

亘史さんの返事を聞いた私は、まず店のドアにかけてある表札を『ＣＬＯＳＥ』から『ＯＰＥＮ』に裏返す。その後、言われた通りに沙綾の部屋に向かうのだった。

「沙綾、起きてる?」
沙綾の部屋のドアをノックするが、返事が帰ってこない辺りまだ寝ている可能性が高い。私はドアを開けて沙綾の部屋へ入る。
しっかり手入れの行き届いている部屋の、壁際に置かれているベッドに丸まっている人影。
ローズピンクの髪をセミロングまで伸ばし、静かな寝息を立てて寝ている少女こそ、この家の長女である山吹沙綾。
「沙綾、起きて」
「うーん、もうちょっとだけ…」
沙綾の肩を優しく揺するが、むにゃむにゃと呟いて寝返りを打つ沙綾。何これ可愛い…じゃなくて。
「起きないとくすぐるよ?」
「はい起きました!」
私がそう言った瞬間、凄まじいスピードで起き上がった沙綾。人間の出せる速度を超えていそうなその動きに苦笑しながら、とりあえず挨拶をする。

「おはよう、沙綾」
「…おはよう、茜」
お互いに苦笑しながら、いつも通りの朝が始まった。

「行ってきます！」
「行ってきます」
「二人とも、今日も練習？」
「そうだよ！だからまた遅くなるね！」

「すいません、家事は帰ってきてから手伝います」
「問題ないわ。気を付けてね、二人共」
「「いってらっしゃーい」」
学校に登校する時間になったので、千紘さん、純くん、紗南ちゃんの三人に挨拶をしてから沙綾と二人で家を出る。亘史さんは店の工房でパンを焼いているので邪魔はできないなと思い、声はかけないでおく。
ちなみに、私と沙綾はバンドをやっている。名前は『ＣＨＩＳＰＡ』。私がリードギターで沙綾がドラムを担当していて、先程千紘さんが言っていた『練習』とはバンドの練習の事だ。
沙綾と横並びで通学路を歩きながら、他愛のない会話を広げていく。
「今日暑いね…」
「そうだね、まあ温かくなってきてると思えばいいんじゃない？」
「うう…私は暑いの嫌いなんだけど」
「そんなこと言ったって、暑さが和らいでくれるわけじゃないでしょ？」
「それはそうだけど…」
私は暑いのが嫌いだ。夏と冬どちらを取るか聞かれたら、速攻で冬を取るくらいには。夏は外に出たくないし、家でゆっくり趣味を満喫していたいタイプの人間なので、

基本的に暑い日は家に籠っている。
「それにしても…」
「？」
「いや、茜の髪の色綺麗だったのになーって」
「…それまだ言ってるの？」
「だってもったいないじゃん？せっかく綺麗な髪の色だったのに」
「そんなのしょうがないよ、校則なんだし」
「でもさー」
隣を歩く沙綾の心底残念そうな表情を横目に、私は自分の黒い髪の先をいじる。
元は水色の髪だったのだが、中学で初めて行われた整容指導の際に校則に引っ掛かるから染めてこいと教師に言われてしまったのだ。私は別に構わなかったのだけれど、夕食の時に話したら千紘さんと沙綾が猛反対していたのを覚えている。
「花咲川は地毛なら問題ないのに…」
「まあ、北山の中で地毛が黒髪じゃないの私だけだし、一人特例で認めるとそこから緩んじゃうからね」
むしろ地毛のままでいることでいらぬ注目を浴びたくなかった、というのも理由の一つだったりする。

あと言い忘れていたけど、私と沙綾は別々の中学に通っている。私は『北山学園』で沙綾は『花咲川女子学園』。『北山学園』は中高一貫の共学校、『花咲川女子学園』はその名の通りこの近辺に存在する中高一貫の女子高で、この地域ではそこそこ有名な学校だ。私の制服はグレーのブレザーと胸元の細い緑色のリボンに、ブレザーと同じ色のスカート。沙綾の制服は上下ともに茶色のワンピースタイプで、胸元には赤いリボンを結んでいる。

そうこうしている内にいつもの集合場所が見えてくる。集合場所には既に待ち人が来ていた。

「あ、来た来た！」

「おはようなつ、今日も元気だね」

海野夏希。沙綾と同じ花咲川に通う同級生で、私の数少ない友人の一人。

「おはよう沙綾！茜もおはよう…って、なんかテンション低いね？」

「夏希がテンション高いだけ。真結と文華はまだ？」

「もうすぐ来る…って言ってたら来たよ、ほら！」

夏希の指さした方向を見れば、私と同じ制服を着た二人の少女がこちらに向かって駆けだしてくるところだった。

「ごめんね、遅れちゃった！」

「ひゃあ～疲れた…」
「いや大丈夫だけど…二人が遅れるなんて珍しいね」
二人の少女…川端真結と森文華は沙綾の言葉に苦笑いする。
「忘れ物しちゃって…」
「二人で慌てて家に戻ったら、電車に乗り遅れちゃったんだ…」
「それは…しょうがないね」
「遅れないうちに行こう。急げばまだ間に合うよ」
このままぐずぐずしてたら間に合わないのはわかり切っているので、私達は慌てて移動を開始した。

「それじゃ、放課後にそっち行くから」
「うん、わかった」
「真結、寝ちゃだめだからね？」
「わかってるよ！」
「それじゃ二人とも、また後で」

花咲川の校門前で沙綾と夏希と別れ、真結と文華と3人で走って移動する。花咲川から北山まではそこそこ距離があるのだ。

急いで走ることおよそ15分後、何とか始業の鐘が鳴る前に学校に到着した。

「はあ、はあ…危なかった…」

「ま、間に合ったぁ…」

「疲れてクタクタだよぉ…」

「も、元はと言えば、2人のせいでしょ?」

真結と文華にジト目を向けつつ、下駄箱で靴を履き替え教室へ向かう。教室に入り席に着いたところで、ちょうど始業の鐘が鳴った。何とか間に合った…

「席に付け、SHR始めるぞ」

教室に入ってきた担任の挨拶を聞きながら、私は静かに安堵の溜息を吐いた。

Vier

時は過ぎ放課後。私達五人はとあるライブハウスで練習をしていた。
「もう一回サビからやろう。沙綾、カウントよろしく」
「オッケー！いくよ、1・2・3・4！」
沙綾のカウントに合わせて楽器の音が響き渡る。自分の演奏に集中しながらも、周りの音もきちんと聞いておく。コードはもう覚えているので、あとはどうアレンジを加えて皆と合わせられるかだし。
（ここは気持ち速くても問題ないね…！）
愛用の薄紫色のギターを全力で弾きながら、本来のリズムとはほんの僅かにずらして皆より先行する。イメージとしては皆の《音》を引っ張っていく感じか。
サビの部分だけ演奏し終えて一息。どうやら上手くいったようで、皆の喜びが伝わってくる。
「…上手くいった！」
「やったね！」

「初めてだよね、ここまで上手くできたの！」
壁際に座り込み夏希、真結、文華の三人が喜んでいるのを眺めていると、沙綾がこちらにやってくる。
「茜のお陰だね、音で引っ張ってくれてたでしょ？」
「…やっぱバレてた？」
「わかるに決まってるじゃん、一緒に練習したのは一番長いんだから。それに、茜があそこのリズムで走り気味になる事なんてないんだし」
私の隣に座りながら沙綾はそう言って笑う。やはり沙綾にはバレていたらしい。伊達に長い間一緒に練習していた訳ではない…という事か。
「でも、よくあんなことできるね。どうやってやってるの？」
「うーん、なんていうんだろう。自分の《音》をロープにして、皆の《音》を引っ張るイメージ？」
「へぇー。結構難しそうだね」
「集中力使うから、あんまり長くは出来ないけどね。まあ、沙綾もできるようになると思うよ？私が出来たんだし」
要領も覚えも悪い私が出来たのだから、多分練習すれば誰でもできるようになると思う。私は呆れるくらい物覚えが悪くて、人が二、三回やればできることを十回も二十回

もやってようやく…何て事もザラだ。
「それにしても、もう初ライブまで1ヶ月無いんだね」
「そうだね…なんかあっという間だったよ」
私と沙綾が『CHISPA』に加入してもう半年以上。ようやく初ライブの権利を得た。しかも地元のお祭りで演奏するとなれば嫌でも気合が入るというもの。現に練習も普段と比べて量が増えたりしている。辛くない訳では無いけれど、楽しさが圧倒的に勝っている状態だ。
「二人とも、そろそろ続きやろう！」
夏希に呼ばれた私と沙綾は立ち上がり、各々の立ち位置へと戻り練習を再開した。

およそ二時間に及ぶ練習が終わり、帰宅した私と沙綾は別行動を取っていた。具体的には沙綾が買い物で、私が家事。放っておくとすぐ千紘さんが無理してしまう為、こう

して役割分担をしながら千紘さんを無理させないようにしているのだ。

沙綾が買い物から帰ってきたタイミングで夕食を作り終えた私は、沙綾と紗南ちゃん、純くんがお風呂から出るのを待つ間に学校の課題を消化していた。

「はぁ…やっと終わった」

たった数問やるだけなのに20分もかかってしまった。この単元はもう5回目なのに未だに公式を覚えられていない。ここでも物覚えの悪さが出てしまっている。

「茜姉ちゃん、ご飯だって！」

いつの間にかお風呂から出ていたのだろう、純くんが部屋の扉のところに立っていた。

「うん、今行くよ」

純くんにそう返事をして、机の上をさっと片付ける。最後に部屋の電気を消して、純くんと共に階段を降りてリビングへ。既に皆座っていて、私達を待ってくれていた。

「それじゃあ、いただきます」

「「「いただきます」」」

亘史さんの号令で一斉に食べ始める。今日の夕食は鮭の塩焼きに大根の味噌汁、白いご飯に漬物と和食に寄せてみた。家がパン屋であってもやはり日本人はお米が食べたいのだ。

「おいしい！」
「ホントだ…茜どうやって味付けしてるの？」
味噌汁を1口啜った沙綾が驚きの表情を浮かべながら私に問いかけてくる。
「どうやってって言われても…普通にやってるだけだけど？」
「その普通にってやつを教えて欲しいんだけど…」
「私は完全に目分量でやってるだけだし…」
正直、本当に目分量で大雑把にやってるだけだからそんなに美味しくないと思う。沙綾や千紘さんが作る料理の方がよっぽど美味しいんじゃないか？
程なくして食べ終わり、食べ終わった後の食器等は沙綾に任せ、私は風呂に入る。
湯船に浸かると、今日一日の疲れが抜けていくような感覚が押し寄せてきた。
「ふう…」
大きく息を吐き、湯船により一層深く浸かる。
（今まで以上に、頑張らないとなぁ…）
私達『ＣＨＩＳＰＡ』の初ライブまで残り1ヶ月を切っている。皆の士気も上々、当日演奏する曲もだいぶ形になってきた。あとは細かいところの調整をやれば、発表できるレベルには到達すると思うけれど…
「私がもう少し要領よくやれたら、もっといい演奏になるのに…」

正直、自分の要領の悪さといったら呆れるレベルである。実際に何度か挫折し、音楽を辞めたいとも思ったけれど…気付けばギターを手に取って練習していた。

（何がそんなに私を駆り立ててるのかな…？）

正直よくわからない。確かに皆とバンドをやるのは楽しいけれど、私は何故『ギター』をやっているのだろうか？そもそも、なんで始めようと…？

ズキッ！

「づぅ!?」

そこまで考えて、唐突に襲ってきた頭痛に思わず呻く。頭の内側から針が刺さっているような痛みに涙目になるが、何とか堪える。

「はぁ、はぁ…今の、なに？」

――早く上がって早めに寝よう。

原因不明の頭痛に若干の恐怖を抱きつつ、寝れば治るだろうと思い早めにお風呂を上がって寝ることにした。

風呂場を出て洗面所で素早く着替える。朝着ていた寝間着とはとは別の寝間着を着て、自分の部屋に戻りドライヤーを使って髪を乾かす。髪を乾かし終え、いざ寝ようとベッドに入った瞬間――

コンコン

「茜、ちょっといい？」
「沙綾？いいよ」
――沙綾が自前のドラム練習パッドとスティックを持って部屋を訪ねてきた。
「どうしたの、何か用？」
「いや、今日の練習で間違えたとこ合わせて欲しいんだけど…もしかして寝るところだった？」
「ううん、大丈夫。それで、どこだっけ？」
ギターケースから自身の愛用のギターと今練習している曲の譜面を取り出しながら答える。それを見た沙綾が笑顔になりながら傍までやってきて、練習したい場所をスティックで指し示す。
「ここだね、お願いできる？」
「いいよ、2小節前から始めよっか」
夜なのであまり大きい音は出せないが、アンプに繋がなければ問題ない。眠るのは遅くなるけど仕方ないな、と思いながら私はギターを弾き始める。
部屋の中で響く私のギターの音色と、沙綾の練習パッドを叩く音。それらをＢＧＭにしながら私は静かに考える。
（私の音楽をやる理由って…）

未だに鈍痛が止まない頭の中で答えの出ない問いを反芻しながら、私はギターを静かに弾き続けた。

F▪nf

私、氷川紗夜には双子の妹と一つ下にもう一人妹がいる。――いや、いたと言うべきか。

双子の妹は日菜と言い、俗に言う『天才』。何をするにしても一番、人が長い間努力し続けてきたことを僅かに触るだけで追い抜き、完全に自分の物にする天賦の才能を持つ少女。

下の妹――茜は『秀才』。要領も覚えもあまり良くなかったが、人一倍…いや、何十倍も努力を積み重ねて確実に物にするタイプだった。

私達三姉妹は常に比べられてきた。その度に日菜と私は褒められ、茜は貶された。

そんな茜の姿を見て、どこか安心していた私がいる――――というのは、残念ながら否定できない。日菜の存在が重圧となっていた私は、心のどこかで茜の事を下に見ていた。

茜はそれに気づいていただろう。それでも、私の事を『姉』として慕ってくれていた。だからこそ、私は茜に誇れるような『姉』になりたいと思ったのだ。

けれど、それは思い違いだった。あの日、橋から突き落とされた茜の全てに絶望し、諦めた者達の目を見てようやく気付いた。

私はもう少し早く、茜の抱えていたものに気付いてあげるべきだった。

そう、茜はもうこの世にはいない。数年前、家族でキャンプに行ったときに川に落ちて流されてしまったから。

そして茜が川に落ちた理由――それは父が橋から突き落としたからだ。

私の父は冷酷で無慈悲。それでいて短気という最悪な性格をしている人物で、酒を飲んでは母親や茜に暴力を振るっていた。

私は茜のいなくなる直前までその事実に気が付けず、何もしてあげられなかった。恐らく私と日菜には見せないようにしていたのだろう。脅されていたのか、母親も茜も決して暴力の事を口にはしなかった。振り返ってみれば、おかしい点は幾つもあったのに。

何故父は私と日菜だけ褒めて、茜を貶したのか。母親が何故、そのことについて何も言わなかったのか。

それを日菜と共に父に問い詰めたところ、あっさりと話してくれた。

――全ては茜が『劣っていた』からだよ。お前らは俺の価値を引き上げる『道具』なんだし、価値を下げかねない『道具』は捨てる…それだけだ。

それを聞いた瞬間、私の中にあった父への信頼が一瞬で消えた。同時に湧き出てきたのは、父に対する怒りと茜に対する罪悪感。何故気付いてあげられなかったのか、この罪悪感が消えることは一生無いだろう。

その後、ついに耐えきれなくなった母が警察に相談したことで父は逮捕され、私達は母の実家へと引き取られた。

そして私はやり場のなくなった怒りをあろうことか、妹の日菜に向けてしまった。それだけは決してしてはならないことだったはずなのに、日菜の存在が重圧になっていた私にはもう限界だった。

その結果、私はさらなる罪悪感を覚えながら日々を過ごしている。もうあの頃の仲の良かった姉妹は見る影もない。

何せ――――自分でそれを壊してしまったのだから。

もう、あの日々には戻れない。

浅い微睡みから私を引き戻したのは、いつもセットしている目覚まし時計と、全身にのしかかる謎の倦怠感だった。今日は私達『ＣＨＩＳＰＡ』の初ライブの日。昨日はギリギリまで調整を続けたので、あまり寝れなかったのが響いているのかもしれない。

怠さを堪えて身体を起こす。この怠さもきっとすぐに消えるだろう。今日は休日だし、店の方も手伝わないと。

服を着替え、部屋を出る。今日は昼過ぎまで手伝いをして、そこから会場に移動して音合わせとリハーサル。そこから本番だ。

この日のためにたくさん練習したんだし、きっと大丈夫だ。そう願いながら、私は階段を下りてリビングへと向かった。

――――けれど、崩壊の足音は直ぐ側まで近づいてきていたんだ。ここで気付けなかったのを後悔することになるのを、今の私は知るよしもなかった。

Sechs

「ヤバいって、次私たちの番だよ!?」
「わかったから、落ち着きなって夏希!」
「さっきから同じことしか言ってないよ!」
ステージの袖のところで待機している私達は、個人差はあるものの全員が緊張していた。夏希なんて、さっきから何度も何度も同じ言葉を繰り返している。それに加えて、普段ツッコミに回らない筈の文華と真結がツッコミをしているのを見ると、こっちまで緊張してくるから笑えない。
――――それにしても、朝感じていた倦怠感は相変わらず消えてくれない。一応普段通りには動けるから無視していたけれど、今になって症状というか…身体が重くなったような気がする。
「茜?」
「ん、どうしたの沙綾?」
「いや、なんか調子悪そうだから。緊張してる?」

「緊張はしてるけど、体調は別に普段通りだよ?」
沙綾には心配をかけたくなくて、思わず嘘をつく。まあ半分は本当だし、全部が嘘ってわけではないのだけれど。ちょっと心苦しいけれどしょうがない。
「もし噛んだりしたらどうしよう〜!」
「そ、そういう時は沙綾と茜が何とかしてくれるよ!」
「ちょっと待って何その他力本願は。バンドリーダーは夏希なんだから、何とか頑張んなよ」
「私たちに急に振られたって、流石に出来ないよ?」
いつの間にか私達を放って進んでいた話の矛先が、唐突にこちらに向いた。私と沙綾は損な役回りを回避するため、正論を投げつけておく。これでとりあえずは…
「で、でもぉ…」
…これはダメなやつだ。相当緊張しているみたいだし、フォローしないと何やらかすかわかったもんじゃない。
「…はぁ、わかったよ。出来るだけフォローするから、なつも頑張ってよ?」
沙綾も同じ結論に行き着いたのだろう。折れることにしたようだ。私もできる範囲でフォローに回るとしますか。
「ＣＨＩＳＰＡの皆さん、準備お願いしまーす!」

「と、とりあえず皆！全力で楽しもう！」
夏希の一言に全員が笑う。どうやらウチのバンドリーダーは何だかんだで頼りになるらしい。
チラッとステージ袖から観客席を見れば、すし詰め状態で満員だった。
私の半身と言っても過言では無いほど愛着のある薄紫色のギターを抱え、静かに集中する。
さあ、ライブの始まりだ。

「こんにちは！ＣＨＩＳＰＡです！」
ステージへと立った私達。ドラム担当の私からは観客席の奥まで見通せる位置で、夏

希や茜、文華の姿がよく見える。夏希と文華は緊張しているのが一目瞭然だ。背中が強張っているのがよく見える。

キーボードを担当する真結も似たような状況だろう。私だって緊張しているせいでスティックを持つ両手が震えている。

――――大丈夫。ちゃんと練習したんだから、練習通りに叩けばいいんだ。

そう自分に言い聞かせながらちらりと茜を見ると、薄紫色のギターを構えたまま自然体で立っていた。その背中は緊張など欠片も感じさせない。本当に緊張しているのかどうか疑いたくなる。

「今日初めてたくさんの人達の前で演奏するんですが、聞いていただけると嬉しいです！」

夏希のＭＣの途中、振り返った茜と目が合う。茜は僅かに微笑みを浮かべて、口だけを動かして言った。

『沙綾なら、ちゃんとできるよ』

「…そうだね。分かったよ、茜」

「それじゃあ早速１曲目、『Ｂｅ　ｓｈｉｎｅ，ｓｈｉｎｉｎｇ』！」

真結のキーボードが音を奏で始める。それに合わせて振り上げたスティックを持つ私の手の震えは、完全に止まっていた。

これなら――――いける。
湧き出てきた少しの自信。それに従って私はひたすらにドラムを叩き続ける。周りの音を聴いてみれば、全員が練習通りに弾けているのがわかった。みんなの表情も楽しそうだ。
けれど…上手くいくと思っていた私に叩きつけられたのは絶望という名の現実。それは、唐突に訪れた。
ドサッ…
決して大きくはない、けれど何故か周りに響いたその音は、茜が突然倒れた音。
――崩壊が、始まった。

身体が熱い。
意識が混濁する。
動かなくちゃいけないのに、立ってギターを弾かなくちゃいけないのに。視界は霞

み、どれほど力を込めても私の四肢はピクリとも動かない。まるで見えない力に磔にされたかのように、私は身体を動かせずにいた。

「茜ッ!?」

誰かの…叫び声？割と近いところから聞こえてくるから、沙綾とか夏希が私の事呼んでるのかな？

そんなことを考えていたら、誰かに身体を抱えられる感触。霞む視界の中誰かの顔を見れば、必死な表情の沙綾が見えた。

「しっかりしてよ茜、茜！」

「さ、あや…？」

今にも泣きそうな表情で沙綾が叫んでいる。沙綾の名前を呼ぶけれど、私の口から出たのは掠れ切った声にならない声だった。

続いて感じたのは背負われる感覚。同時に視界に入ってきたのは、見慣れたローズピンクのポニーテール…沙綾だ。どうやら私は沙綾に背負われているようだ。

そのままどこかに運ばれていくのは朧気ながら知覚出来たけれど、私の意識は限界を迎えてしまったらしい。

声も出せぬまま、私の意識は闇へと沈んでいった。

「――極度の過労ですね。ここまで溜め込んで今まで倒れなかったのが不思議なくらいです」
「そう、ですか…」
「少なくとも、一週間は絶対安静です。意識が戻り次第連絡致します」
「ありがとうございました…」
「…」
先生が病室を出ていくのを見送って、母さんと共に礼をする。
「お母さんは一度家に戻るけど、沙綾はどうするの？」
「…まだここにいるよ」
「…わかったわ。あまり遅くならないようにね」
母さんが病室を出ていく音がした。それをぼんやりと聞きながら、私はベッドの側へ移動する。
――何で、気が付かなかったのだろうか。
茜の眠るベッドの横でパイプ椅子に座りながら、ゆっくりと茜の髪を撫でる。
――今思えば、おかしな点はあった。ライブ前だってぼーっとしていたし、あまり元

気が無い感じだった気がする。…もう少し早く気づいていたら、また違った結末になっていたのだろうか?もしこのまま茜が目を覚まさなかったら…

幾つもの悪い結末が頭をよぎり、思わず頭を抱えこむ。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

茜の左手を握り、掠れた声でひたすら懺悔する——私に残された道は、それしか存在しなかった。

Sieben

目が覚ました私がまず最初に感じたのは、全身に重くのしかかる様な倦怠感。それを堪えながら首だけを動かして周りを見渡してみれば、どこか見覚えのある真っ白な床や壁が目に入った。

「ここは…病院?」

記憶喪失の私が山吹家にお世話になる前…ただの『茜』だった時に入院していた場所。それ以前の記憶がない私にとっては数少ない記憶のある場所で、ここに私がいるということは…

そこまで思い至った瞬間、直前の出来事が一気にフラッシュバックし、自分が何をしたのかを思い出した。

そうだ…私、ライブの時に倒れて…!

「っ…!?ライブはっ…!?」

慌てて起き上がろうとして、強烈な眩暈に襲われる。ベッドに手をついて暫く眩暈が収まるのを待っていると、病室のドアが音を立てて開き、沙綾が入ってきた。

「あ、茜っ！」

「沙綾――きゃっ!?」

私を見た瞬間叫んだ沙綾に状況を聞こうと口を開いた瞬間、沙綾に勢いよく抱き着かれる。何事かと思いながら沙綾を見れば、その肩が小刻みに震えていた。

「よかった――心配、したんだから…」

「…ごめん」

沙綾の絞り出すようなか細い声が、否応なしに私へ罪の意識を叩きつける。

――私、また失敗したんだ。

昔からそうだった。皆のために…失敗しないようにって、周りを一切見ずがむしゃらに努力して、周りに迷惑をかける。そのせいで何度父親に殴られたものか…

そこまで考えて、ふと気付く。

――昔？

――父親？

――一体、この記憶は何だ？

「…ッあ!?」

ズキリ、とまた頭が痛くなる。思わずこめかみを押さえれるけれど、痛みは一向に引いてくれる様子を見せない。それどころか痛みは次第に増してきて、小さく声を漏らし

てしまう。

「茜、どうしたの!?」

沙綾の叫ぶ声が聞こえてくるけれど、それに反応出来るほど余裕が無い。視界にノイズが走り、次々と見覚えのない光景が現れては消えて、私を困惑させていく。

――小さな女の子が3人、手を繋ぎ並んで道を歩いている光景。3人に共通する特徴として、ライトグリーンの髪を可愛く結んでいるのが見えた。

『ほら、あかねちゃん! はやくいこう!』

『はやくしないと、おいていっちゃうよー?』

『あ、まってよ■■おねえちゃん、■■おねえちゃん!』

左端と真ん中の女の子が右端の女の子の名前を呼びながら手を引く。2人の女の子に手を引かれ右端の女の子が転びそうになりながらも、日が沈みかけオレンジ色に染まる道を歩いていき――そこで景色が途切れる。視界に走っていたノイズが収まっていき、周囲の景色が色彩を取り戻していく。そして、心配そうにこちらをのぞき込む沙綾と目が合った。

「茜、大丈夫? やっぱりまだ無理は…」

「だ、大丈夫だよ! ずっと寝てたんだから、もう平気だって!」

実際、さっきあれほど感じていた頭痛はいつの間にか消え去っていたし、倦怠感もだいぶマシになっている。元に戻ったとは言い難いけれど、とりあえずはもう平気だろう。

「それで、さ…ライブは、どうなったの?」

「っ!…」

私がそう聞くと、分かりやすすぎるくらいに沙綾の肩がビクッと跳ねた。さっと顔を伏せた沙綾の表情は陰になっていて見えないけれど、その行為こそ意味を理解するには十分なものだった。

「…ごめん。私のせい――」

「違うっ!あれは茜のせいじゃないよ!」

沙綾に謝ろうとした瞬間、大声を出して沙綾が私の言葉を遮る。普段ここまで大声を出さない沙綾に驚いていると、沙綾が伏せていた顔を上げた。

「茜は凄い頑張ってた!練習だって、家の手伝いだって、勉強だって!」

――泣いていた。

あの沙綾が。

「茜が頑張ってたのは、私が一番知ってる!」

その蒼い瞳から堪えきれない涙を零しながら、沙綾は激情のままに叫び続ける。

「私はっ…そんな茜の頑張りに甘えてただけだった。ちゃんと私も協力出来ていたら、茜が倒れることも、なつ達に迷惑をかけることも、母さん達を心配させることも…無かったかもしれないのに…！」

何も言えなかった。私の努力の結果が、これ程まで沙綾を追い詰めてたなんて。ライブを成功させたくてあれほど練習したのに、結局その努力は無意味なものになってしまったし、夏希や千紘さん達にも迷惑をかけてしまった。そして何より——沙綾を泣かせてしまったというその事実が私の胸を締め付ける。

「…私、もうバンド辞めるよ」

「え…？」

「私だけがこんな楽しんで良いわけない。周りの人に迷惑かけてまでやる物なんかじゃ——」

バシッ！

「…今、なんて言ったの…！」

頬を叩かれた沙綾は呆然としながらこちらを見ている。一瞬、叩いてしまった事に対する後悔が胸中を満たしたけれど、今の一言は流石に許容出来るものじゃなかった。

「ふざけないでよ！私は——バンドをそんな軽い思いでやってた訳じゃない！」

「……！」

「周りに迷惑をかけてまでやるような『物』なんかじゃないなんて誰が決めたの!?少なくとも、私や夏希達はそんなこと思いながら練習してない！」

「わ、私は…」

「皆と演奏して、楽しくてしょうがなくって！皆とならやっていけると思って、本気で練習してた！なのに…今になってその努力を踏みにじるような事、言わないでよ！」

「っ！…ごめん、なさい…」

視界がぼやけ、沙綾の悲しみに彩られた顔が滲む。きっと私は泣いているんだろう。様々な感情がごちゃ混ぜになって、頭の中はぐちゃぐちゃ。沙綾の顔を見ることすら嫌になって、私は沙綾に背を向ける。

「…もう、出てって」

その一言が、沙綾にどれほどの傷を負わせるかも考えず、私は沙綾にそう告げる。

「…わかった」

その声と同時に響く、少しずつ遠ざかっていく足音。思わず振り返りそうになるけれど、全精神力を総動員してぐっと堪える。

病室のドアが締まり、残された静寂に身を委ねながら、私はごちゃ混ぜになった心を整理するべく、静かに目を閉じた。

Acht

茜の病室から静かに退室し、そのまま廊下の壁に寄りかかる。
『――今になってその努力を踏みにじるような事、言わないでよ！』
「…はっ」
私の口から一番最初に漏れたのは、自身に対する失笑だった。
（一番知ってる…？何も知らなかったじゃん…）
茜にあんなことを言っておきながら、結局私は茜を傷付けただけ。何が一番知っているだ、何もわかってなかったじゃないか。あれほど努力していた姿を見ていたのに、私は茜の努力を完全に否定してしまった。
（バカだなぁ…私って）
周りに迷惑しかかけず、そのくせ他人の努力を否定する…そんな人間が、自分が楽しいことだけやっていいのか。答えは――否。
『もう、出てって』
目から大粒の涙をぽろぽろと零しながら呟く茜の姿が脳内に再生される。

（これは、嫌われちゃったかな…）

正直、これぱかりは私が悪い。あれだけの事をしてしまった以上、嫌われて当然だから。

「…でも、辛いなぁ」

ぽつり、と。静かに呟いたのと同時に視界がぼやけ始める。頬を伝う涙を指先で拭うけれど、拭っても拭っても涙は止まらない。

茜が家に来てから三年。一度も喧嘩することなく、まるで本物の姉妹のように過ごせた幸せな時間。それが失われるかもしれないと思うと…辛い。

「っ…うあぁぁ…」

誰もいない病院の、僅かな月明かりが差し込む廊下。そこで私は静かに——泣き続けた。

「…沙綾」

廊下の突き当たり、角を曲がった直ぐの所に私達は隠れるように立っていた。

茜のお見舞いに行こうって事になって、茜の入院している病院に来たはいいんだけど…廊下まで聞こえた茜の怒鳴り声にビックリして歩みを止めちゃったんだよね。そし

たら茜の病室から沙綾が出てきて、さらにビックリした。いつもの茜なら、沙綾に絶対怒鳴らないし。

病室の外の壁に寄りかかって、静かに泣き崩れる沙綾。それを見て、相当な出来事があったんだと瞬時に理解出来た。

「…皆、今日は帰ろう」

「夏希？何言ってるの？」

「少なくとも、今日は話できる状態じゃなさそうだから」

沙綾に聞こえないくらいの声で皆に言って、私は来た道を引き返す。あの状態で私達が出ていったら、2人はきっと無理をする。そんなに無理してまで、笑って欲しくはないから。

2人には、これ以上無理させたくない。

そう願う私はきっと、間違ってないよね？

――1週間後。ようやく退院出来た私は、久しぶりの我が家へ帰宅した。三年前と同じく千紘さんが迎えに来てくれたけれど、沙綾の姿は無い。それを少しだけ寂しく思いながらも、喧嘩別れした後に会っても気まずいだけだと思い直す。

――正直、私にも悪い所はあると自覚している。いや、むしろ私が全面的に悪いと言うべきか。あそこで手を上げるなんて、なんて馬鹿なことをしてしまったんだろう。

纏まらない思考を抱えたまま、やまぶきベーカリーのドアを開ける。途端に漂ってくるパンの匂いが、何故か酷く懐かしく感じた。

「ただいま」

「おかえり、茜。もう大丈夫なのかい?」

「はい…ご迷惑をお掛けしました」

ドアの開いた音に反応して工房から出てきた亘史さんに、深く謝罪する。今回の件で多くの人に心配させてしまったから、謝るのは当たり前だし私自身謝らないと気が済まなかった。

「いいんだよ、無事ならそれで。ただ、あまり無理はしないようにね」

「…はい、お気遣いありがとうございます」

「それと今日は店の手伝いはしなくていいから、しっかり休みなさい」
そう言われて驚く。今日の店番は誰がやるのだろうか？
「店番は沙綾がやってくれるらしいから、あまり心配しなくていい。…それよりも、沙綾と何かあったのかい？お見舞いから帰ってきた時、浮かない顔をしていたから」
疑問と心配が顔に出ていたみたいで、苦笑しながら亘史さんが説明してくれた。それよりも沙綾、というワードに思わず反応しそうになるが、それだけは顔に出さない。
「…いや、別に何もなかったですよ？」
「…そうか、ならいいんだ」
返事が僅かに遅れたのが怪しく思われるか——と思ったけれど、亘史さんは追及してこなかった。
「それじゃあ私は仕事に戻るから、部屋で休むこと。いいね？」
「わかりました」
工房へと戻っていった亘史さんの背中を見送り、階段を上がって自分の部屋へと向かう。
（…やっぱり、謝らないとダメだよね）
何度考えても、昨日の喧嘩は私が悪い。いつまでもこんな状態で居るのは私だってまずいと思っている。ただ、どうやって謝りに行くべきなのかわからない。

（困った…なんて言いに行けばいいのかな…？）

そんな事を考えながら、階段を上り切ったところでがちゃり、とドアノブを捻る音。

私の部屋の隣…沙綾の部屋のドアが開き、中から沙綾が出てきて――目が合う。合ってしまった。

「あ、茜…」

沙綾の表情が段々と翳って行くのが見えた瞬間、直前まで考えてた事が全て頭から飛び、私の頭の中は真っ白になった。謝らないといけないのに、舌が張り付いた様に動かない。

「…ただいま」

どうにかそれだけ言って、自分の部屋のドアを開けて中へ。後ろ手にドアを閉めて、そのまま床に座り込む。

「…なんで」

自分でも、何がしたいのかわからなかった。沙綾に謝りたいと思ってたはずなのに。

――何故あそこの場面で逃げたの？

頭の中に響く声。どこかで聞いたことのある声だったけれど、思い出せない。

（わからない。何で私は逃げたの？）

――質問に質問で返さないでよ。謝るんじゃなかったの？

（そのつもりだったよ。でも…謝ろうとしたのに、いつの間にか逃げてた）

――本当は分かってるんでしょ？

（…やめて）

――沙綾はもう私（オマエ）の事が嫌いなんじゃないかって、どこかで考えていたんじゃない？

（…そんな事、ない）

――本当に？

（…そんな、こと）

――答えられないのが何よりの証拠だよ。私（オマエ）は、大切な人に嫌われたくないくせに、大切な人の事を信頼出来ない臆病者なんだから。

（ち、違う！私は……！）

――まあいいさ。せいぜい否定し続けて、壊れ果てるのがいいよ。

そんな一言を最後に、声が消えた。聞き覚えのある声だったけれど、誰の声かなんてとても思い出せる状況じゃない。

（私は…沙綾を信頼してない？）

誰かの声に言われたその一言が、頭の中をぐるぐると回っていく。どれだけ自分に問いかけても、答えが出ることは無い。そんな情けない自分に対する自責の念と、沙綾への罪悪感。それらに押し潰されそうで、私はもうどうすればいいか分からなかった。

「誰か…助けて」

番外編

IF story:BanG Dream! 7th Live! Part1

――空港のガラス張りの窓から差し込む暖かな日差し。その眩しさに目を細めながら愛用のギターの入ったケースを背負い、キャリーケースを引きながら歩き出す。空港のドアが開いた瞬間、冬らしさを感じさせる冷気が肌を突き刺すが、着ていたコートのボタンをきっちりと閉め、多くの人々で賑わう空港の出口から荷物を持って迎えのタクシーの元へと向かい、荷物を運転手に預けてタクシーに乗り込む。

タクシーの中でコートのポケットからスマホを取り出し電源を付けると、数年前に沙綾、紗夜姉さん、日菜姉さん、私の四人での写った壁紙が映し出された。日菜姉さんが紗夜姉さんに、沙綾は私にそれぞれ笑顔で抱き着いていて、私と紗夜姉さんが隣同士。私は困ったように笑いながら、紗夜姉さんは慌てた表情で、二人をそれぞれ受け止めている。

懐かしいなぁ、なんて思いながらスケジュール帳のアプリをタップして開き、今日の予定を確認する。かなり予定の詰まったスケジュールを眺めながら画面を下へとスクロールすれば、今日の日付の欄と共に予定が表示されているのが見えた。

今日は2月21日。紗夜姉さん達Ｒｏｓｅｌｉａがプロのバンドとしてデビューしてからひとつの目標にしていた、日本武道館でのライブの日。それに加えて22日に同じくデビューした六花ちゃんの所属する『ＲＡＩＳＥ　Ａ　ＳＵＩＬＥＮ』、23日には沙綾達『Ｐｏｐｐｉｎ'，Ｐａｒｔｙ』がライブを行うようで、最近話題のガールズバンド達が勢揃いする様に、音楽業界は大いに賑わっているらしい。

…何故『らしい』とあやふやな言葉を使っているのかと言うと、私自身把握しきれていないというのもある。二年ほど海外で仕事をしていたのに加えて、つい一昨日にある有名な歌手のライブにバックバンドとして出演してきたばかり。その準備やら調整やらで大忙しだった事で沙綾や紗夜姉さん達と全く連絡を取れていないうえ、海外に日本の音楽業界の情報が入ってくるのは珍しい。ちなみに最後に連絡を取ったのは紗夜姉さん達の武道館ライブが決まった時。その時にある程度の情報は紗夜姉さんがメールで送ってくれたから、それを元に何とかスケジュールを調整して休みを取ることができたけれど…昨日は昨日で帰国するための飛行機に遅れそうになるわ、やっと乗れたと思ったらアクシデントで飛行機が飛ばないわ…大変な思いをした。

ちなみに今は武道館から少し離れたホテルに向かっている。最近になって海外での仕事が増えてきたから、あまり日本に帰れていなかったのもあって凄い久しぶりだ。景色も懐かしいと思うものばかりで、二年って凄いと思ってしまう。本当は薄れた記憶の補強も兼ねて武道館周りを散策しようと思っていたのだけれど、マネージャーがそれを許してくれなかった。なんでも、私がここにいるのが一般人に知られてしまえば大騒ぎになってライブどころの話じゃなくなってしまうから、というのが言い分らしい。

私からしたら、そんなに有名になっていたことに驚いたけど。高校を卒業してからはずっとギタリストとして活動してきて、いろんなバンドのヘルプとして入って演奏して…ってとにかくがむしゃらに弾いていたから、正直人気とか気にする暇もなかった。海外にいた二年間だって慣れない環境や言語に戸惑ったり、ギターの腕前に伸び悩んで焦ってオーバーワークになって倒れたり。

…正直この事は沙綾や紗夜姉さんたちに言わないでおきたい。もしバレたら正座させられて説教は決定だし、それを避けるためにも秘密にしておかないと。

「お客さん、着きましたよ」

「あ、はい」

どうでもいい方向に思考が寄っている間にどうやらホテルに着いたらしい。スマホの電子マネーで料金を払いコートのポケットに放り込んだ後、変装用の帽子と伊達メガ

ネを付けてタクシーを降りる。キャリーケースとギターケースを受け取り、運転手に一礼してからホテルへと足を向ければ、ちょうどホテルの入り口の自動ドアが開くところだった。

　中から出てきたのは、如何にもＲｏｓｅｌｉａのファンですよといった服装の男女のカップル。いわゆる法被という代物を着ていて、その法被の背中側にはメンバー個人のイラストがプリントされている。イラストを見る度に思うけれど、凄い再現度だ。実際に模写して描いたやつなのだろうが…

（よくこれの売り出しを湊さんや紗夜姉さんが許可したね）

　なんてことを考えながらそのカップルの隣を通り過ぎようとすると、カップルの女性の方が一瞬こちらを見て驚いた顔をした。

「あ、あの！」

「はい？」

「氷川紗夜さんですか!?」

「へ？あぁ…」

　一瞬自分の事がバレたのかと思ったけど、どうやらそうでは無かったらしい。中学の頃と違って今の髪の色は地毛の色だから、特徴的なアイスグリーンの髪が目立っていたみたい。今は紗夜姉さんくらいに長いから、それ見て勘違いしたのかな。

「申し訳ないですけど、人違いですよ」
「あ、そうですか…すみません」
「いえいえ、それじゃあ失礼します」
女性に別れを告げてホテルの受付カウンターへと歩を進める。後ろをチラリと振り返ると、女性が先程の男性の隣へ並び再び歩いていくのが見えた。
その姿が何故か昔の自分と沙綾に重なって、思わず足を止めてしまう。もう振り切ったはずの、過去の私の姿。
「やっぱり、整理はついてない…か」
どうあったって、私が『山吹茜』として過ごした日々は本物で、消すことの出来ない…いや、消したくない過去だ。出来ることなら思い出として、心の内に残しておきたい…そう望んでいる自分がいる。
「…チェックインしないと」
ここで過去を振り返る暇はないから、思考を切り替えて歩き出す。
「予約していた氷川ですが」
「はい、ご予約の氷川様ですね。お部屋の方はエレベーターを上がって5階、19号室になります。既にお部屋の準備は出来ていますので、ゆっくりお寛ぎください」
「ありがとうございます」

礼を言って予約していた部屋のカギを受け取り、たまたま来ていたエレベーターに乗り込み5階のボタンを押す。ドアが閉まり、エレベーターが緩やかなスピードで上昇していくのを感じながらぼーっとしていると、不意にスマホの着信メロディが鳴り響く。

『☒~♪~』

はっとしてポケットからスマホを取り出すと、光の灯った液晶画面に踊る『リサさん』の文字。今はリハーサルの真っ最中じゃないのかと思いつつ、とりあえず電話を繋げる。

「はい、氷川ですが」

『あ、出てくれた。やっほー茜、元気にしてるー?』

二年ぶりに聞くリサさんの声。あんまり変わってない…昔と変わらない気軽さで電話してくる彼女に若干の懐かしさを感じつつ、この時間帯にかけてくるその神経に呆れ果てる。リハをしろ、リハを。

「リサさん…リハの真っ最中じゃないんですか?私なんかに電話かけてる暇ないすけど」

『そんな悲しいこと言わないでよー。お姉さん、泣いちゃうぞ?』

「…切りますよ?」

『わあちょっと待って!?切らないでー!』

私の投げた質問を軽くスルーしたリサさんに変わらないなぁ、なんて思いつつ電話を切ろうとするとかなり焦った声が聞こえてきた。

「こうしてる間にも時間が過ぎてるんですよ?リハを中断して電話かけてるんでしょうし、私紗夜姉さんにとばっちり喰らいたくないんですけど」

このやり取りをしているのが紗夜姉さんにバレれば間違いなくリサさんは説教だし、私にも飛び火してくる可能性は否定できない。私は帰国早々に説教なんて受けたくないのだ、勘弁してほしい。

『待ってってば!今回はちゃんと用があるし、紗夜にも許可貰ってるんだって!』

「紗夜姉さんが…?ならそれを言ってくださいよ」

『聞かずに切ろうとしたの茜のくせに…』

リサさんの呟きを聞かなかったことにして、とりあえず真面目に話を聞くことに。5階に到着したエレベーターから出た私は、リサさんに話の続きを促す。

「それで、用ってなんですか?」

『あのさ、今日のライブ…見に来るんでしょ?』

「ええまあ、そのために帰国しましたし」

『今はどこにいるの?』

「?近くのホテルですけど…」

話している内に１９号室に到着した。カードキーをセンサーに押し当て解錠し部屋の中に入り、荷物を部屋の壁際に寄せソファに座り込む。ライブでギター弾いた後休む暇もなく帰国だったから、ちょっと疲れちゃった。

『なら、荷物置いたら急いで武道館に来て欲しいんだ。あ、ギターは持ってきてね？』

「は？」

今から？まだ着いたばかりなのに、ちょっと理不尽すぎない？

『話はスタッフさんに通してあるから、裏口で名前出せば通してくれるよ！もうリハ始まるから切るね！』

「ちょっ、ま――」

ブツッ、ツーツーツー。

「本当に切ったし…しかも休む暇ないじゃん…」

何で私を今武道館に呼びつけたのかさっぱりわからないけど、とりあえず行ってみよう。帰国直後で少なからず疲労はあるけれど、動けない訳じゃないし。

そう結論付けて、愛用のギターが入ったケースと貴重品の入ったショルダーバッグを引っ掴むと、来た道を戻る様に私は走り出した。

「お客様、建物内を走るのはご遠慮いただけると…」
「…すみません」

IF story—BanG Dream! 7th Live!Part2

まだ太陽が頭上高く浮かんでいる時間。二月にしては暖かい風を肌で感じながら、私はホテルから武道館までの道を全力で走っていた。

暑い。コートを着たまま走ってるせいか、熱が籠ってとにかく暑い。とりあえず走りながらコートのボタンを外して、前を軽く開けておく。背中にギターケースを背負ってるせいで背中付近の熱は排出されないだろうけど、前が涼しくなるだけマシだ。そう割り切って道を全速力で走る。途中で何度か変装用の帽子が脱げそうになってその度に被り直すのが鬱陶しく感じたので、帽子を脱いで手に持つことにした。

地下鉄の入り口を通り過ぎて、隣に池が見える坂道を上りきり武道館の門の側へとやってきた。門をくぐったのと同時に恐ろしいほどの視線がこちらに向けられたのを感じ取り、思わず吃驚する。

「おい、あれって…」

「氷川さんじゃないのか…？」
「ウソ、本物!?」
そういえば変装用の帽子を脱いだんだっけ、なんて考えつつ向けられる視線を全て無視して裏口へ。その途中ですれ違う人たちもこちらを見るものだから、流石に気分が悪くなってくる。ライブの時とかはギターを弾くのに一生懸命だからあまり気にならない視線も、プライベートの時だとそうはいかない。
（うう…やっぱ慣れないなぁ）
これぱっかりはマネージャーが正解だった。何時までたっても慣れることのできない感覚に辟易しつつ、ようやく一般客のいない場所まで移動できた私は小さくため息をつきながら裏口に立っていた警備員に事情を説明する。
「あの、氷川紗夜の妹の氷川茜ですけど…」
「身分証明書などはお持ちであれば見せていただけますか？一応の決まりなので…」
「わかりました」
まあそりゃそうだよね。名前だけで通れてしまえば警備の意味が無くなってしまうし。その点で言えば、この警備員はしっかりと職務を果たせていると言える。
「これで大丈夫ですかね？」
「はい、確認いたしました。このまま真っ直ぐ通路をお進み頂ければ、直ぐにアリーナ

に到着します。既にリハは始まっていますが、気にせず入っていただいて良いとの事なので。あと…」

「？」

そこで言葉を区切った警備員に疑問を抱きつつ視線を向けると、警備員は服のポケットからハンカチを取り出し、こう言った。

「サイン…頂けますか？」

「は、はあ…私ので良ければ」

取り敢えずショルダーバッグから普段持ち歩いているペン入れを取り出し、ハンカチにさっと自身のサインを書く。二年前から求められるようになったサインも今ではだいぶ早く書けるようになったと思う。

サインを書いたハンカチを警備員へと返すと、警備員は嬉しさ半分照れくささ半分の表情で「ありがとうございます」と呟いた。そんな警備員に会釈して、武道館へと入場する。

入った瞬間、圧倒的な練度だとすぐにわかるような演奏が響いてきた。流石Ｒｏｓｅｌｉａだなと思いつつ、締め切られた鉄の扉の前に立ち、静かに深呼吸する。

（なんか緊張してきた…）

Ｒｏｓｅｌｉａの演奏に圧倒されたからなのかわからないけど、緊張が押し寄せてく

る。でもこの緊張は——きっとライブの時に感じる物とは違う。
これはきっと武者震い。現に私の心の中には対抗心がメラメラと燃え上がっている。
やっぱり負けず嫌いなのは紗夜姉さんに似てるんだなって思いつつ、呼吸を整える。
（さあ、行こうか…！）
そんな決意を胸に、私は扉のノブに手をかけ一気に押し開けた。

円形に配置された客席の中央、可変式のステージの上に立ち楽器を演奏する四人の少女。アイスグリーンの髪を長く伸ばした少女が弾く水色のギターが正確無比ながらしっかりと存在感を主張しながら吠え、紫色の髪をツインテールに結んだ少女の粗削りながら確かな技術の高さを伺わせるドラムの音が響く。その隣では艶やかな黒髪を腰まで伸ばした少女が一種の芸術のような音色を奏で、明るい茶髪の少女が持つ真紅のベースがその優しい音色で三人の音を包み込む。

四人の奏でた音が寄り合わさって一つの音楽となり、会場を駆け巡っていく。それを客席の二階で静かに聴いているのは、会場の照明から放たれる光を反射して銀色に煌めく長髪を持つ一人の少女。

「――あこ、もう少しだけ強く叩けるかしら?」

「わかりましたっ、友希那さん!」

観客席の少女――湊友希那からの要望に返事をした先程ドラムを叩いていた少女、宇田川あこが先程より少しだけ強めにドラムを叩く。少しだけ勢いが増したドラムの音を聴きつつ、友希那はイメージする。

全ては、Ｒｏｓｅｌｉａの音楽を最高の形で観客に届ける為に。

まだアマチュアだった頃にやった主催ライブとは違い機材や音響の調整などはスタッフの担当の為、こんな事をしなくても良いのだが、彼女達の辞書に『妥協』という文字は存在しない。

「紗夜、もう少しだけ音を大きくしていいわ」

「わかりました」

「リサ、今の場所はもう少し音を主張していいのよ」

「ん、オッケー」

「燐子、照明をもう少しだけ暗くするけれど手元は見えるかしら?」

「は、はい…大丈夫です…」

故に最終調整も彼女達自身が行い、納得のいく音を出すまでひたすらに続けるのだ。

（今日のこのステージは、私達にとっての目標のひとつでもあった）

二階席の上で四人の演奏を聴きつつ、友希那はこれまでの道のりを振り返っていた。

2年前、プロバンドとしてデビューしたＲｏｓｅｌｉａの目標——それが今、叶おうとしている。それは確かに自らの成長を示すものであり、喜ぶべき事だ。

（——けれど、あの子は私達の更に先を進んでいる）

脳裏に浮かぶのは、2人の姉に追いつこうと文字通り死ぬ気で努力を重ねてきた少女の姿。かつて2人の姉と切磋琢磨すると宣言した彼女はいまや、私達の遥か先を走っている。

（彼女を焚き付けたのは私達…そんな状態でいつまでも負けている訳には行かない）

そう、武道館はあくまで通過点。全ては彼女に勝ち、頂点を目指す為。

（ただ——今日だけは特別ね）

共に切磋琢磨するライバルのような存在となった少女も、今日は観客としてライブに来るらしい。数年ぶりに会う彼女の技術はどれほど上がっているのか、今から楽しみで仕方がない。

（私達の音楽を——私達の成長を見せてあげる。だから——貴方の音楽を、私達に見

せて頂戴）

静かに唇の端を吊り上げ好戦的な笑みを浮かべる友希那。同時に重い音を立てて開いたアリーナの扉と、その奥から姿を現した友希那の…いや、Ｒｏｓｅｌｉａのライバル的存在。

ここに役者は揃った。数十年後の未来、音楽史にその名を刻まれることになる少女達のライブが今、幕を開けようとしていた。

IF story:BanG Dream! 7th Live! Part3

そして――時は来た。時刻は夜の6時を周り、武道館周辺は入場を今か今かと心待ちにしているであろう大勢のファン達によって埋め尽くされ、会場のキャパシティが心配になってしまうほどの人数だ。

「うわぁ～凄いね！流石Ｒｏｓｅｌｉａの皆さん！」

「香澄、あんまりはしゃぐとバレるから静かにな」

その中に変装をして紛れ込み、会場周辺を歩く5人の少女達。彼女達こそ、今をときめくガールズバンド『Ｐｏｐｐｉｎ☒Ｐａｒｔｙ』。彼女達も武道館でのライブを2日後に控えているのだが、本番前に根を詰めすぎるのも身体に悪いという事で、息抜きとしてライブの観戦にやって来ていた。

「ふふ、やっぱり有咲って香澄の保護者みたいだよね」

「なっ、何言ってんだ沙綾！んなわけ…！」

「有咲は…私の事嫌いなの？」

「うっ…別に、そういう訳じゃ…ねえけど」
「有咲～！」
「やめろ、くっ付くなぁ！」
「ふふ、やっぱり変わらないね」
「りみ、ハンバーグ食べに行かない？」
「い、今から？今からは無理だよ、おたえちゃん…」
沙綾が有咲をからかい、有咲がいいように翻弄され、香澄が抱きつき、有咲が照れながら絶叫する。それを見ているりみがくすくす笑い、おたえが空気の読めない発言をする。在りし日のポピパの日常がここに蘇っていた。
…注意した本人が1番騒いでいる件については、コメントを控えさせていただく。彼女の名誉の為にも、ここは言わない方が良いはずだ。
ちなみに、こうやって騒いでいるせいで周りの人間に少しずつ正体がバレ始めているのも内緒なのである。
「ねえさーや、茜ちゃんって来ないの？」
「うーん…たまに連絡は取り合うんだけど、ここ2年くらい会えてないからよく分からないかな…来るなら連絡が来てるはずだし…」
とても残念そうに言う沙綾。事実、彼女が茜と連絡を取ったのは数ヶ月前、電話で少

し話した程度だ。沙綾も茜も、お互い忙しい時期だったため仕方ないと言えば仕方ないのだが…沙綾としてはもう少し連絡を取っておけばよかったと思っているようで、後悔の色が強く顔に出ている。

そんな沙綾の横顔を見たりみはそっと沙綾の手を取って笑う。

「りみりん…？」

「沙綾ちゃん、大丈夫だよ。茜ちゃんは、沙綾ちゃんのことが大好きだもん」

りみの姉――牛込ゆりは、りみが高校2年生の時に単身海外留学に行っており、その間彼女はずっと1人だったのだ。大好きな姉と離れ離れになる辛さを、彼女は知っている。

だからこそ――彼女は自信を持って言えるのだ。例え血が繋がっていなくとも、絆は繋がっているのだと。

「これくらいの事で、沙綾ちゃんが不安になるのはダメだよ？茜ちゃんの事、信じてあげよう？」

「…そうだね。ありがとう、りみりん」

「ふふふ、どういたしまして」

「――くしゅん！」
「茜さん？風邪でもひいたの？」
「いや、そういう訳じゃないけど…」
「だ、大丈夫…ですか？」
「…無理させてしまったかしら？」
「茜、体調が悪いなら言いなさいよ？」
「その時は私が看病して――！」
「結構です！」
香澄達（彼女達）は知らない、かつて共に切磋琢磨した仲であるあの少女がここにいることを。
それも当然だ。Ｒｏｓｅｌｉａのメンバー達によって仕掛けられたドッキリのようなものである事も、彼女達には知らされていないのだから。
「楽しみだね、みんな！」
「そうだね」

「なんか私まで緊張してきちゃったな…」
「燐子先輩…大丈夫なのか？」
「紗夜さんのかっこいい所、茜の分まで目に焼き付けておかなくちゃ！」

「皆、準備はいいかしら？」
「はい」
「問題ないよ、友希那！」
「バッチリです！」
「いつでも…行けます…！」
「――茜、頼むわね」
「――はい！」
「それじゃあ皆、行くわよ！」

そして、午後7時。
ＢａｎＧ＿Ｄｒｅａｍ！７ｔｈＬｉｖｅ　Ｄａｙ１『Ｈｉｔｚｅ』――開演。

☆☆☆

音楽業界、ひいてはミュージシャンの間ではライブなどの聖地として有名な日本武道館。総キャパ数１４４７１人と非常に多く、まさに聖地と呼ぶにふさわしいものだ。

当然、デビューから2年足らずで立てるような生易しい場所ではない。だが彼女達Ｒｏｓｅｌｉａはその圧倒的な演奏技術によってそれを成し遂げ、こうしてこの舞台に立つ事になったのだ。

開演時間を過ぎた瞬間、武道館のステージ中央のギミックが作動。可変式のステージがせり上がり、中から５つの棺桶が姿を現す。

会場に流れ始めた荘厳な音楽と吹き出した白煙と共に棺桶が開き――白煙を引き裂くように現れた、５人の少女。彼女らは各々の配置に着くためステージ上を歩き、観客達はざわめきながらも彼女達を見守る。

そうすること１０秒ほど。マイクスタンドの前に立った少女が声を出した瞬間――空気が、変わった。

『こんばんは、Ｒｏｓｅｌｉａです』

銀色の髪を靡かせながら話す少女――友希那の、その声が。静かに呼吸をした時の、ほんの僅かな動きが。観客達の目線を釘付けにして離さない。各々の配置に着いた他のメンバー達は自身の楽器を構えている。

『今日は来てくれてありがとう。今夜は私達の成長した姿を、貴方達に見せてあげるわ』

そう不敵に笑いながら言い切って、友希那は右手を掲げ――

『1曲目、ＢＲＡＶＥ　ＪＥＷＥＬ』

――青薔薇が、咲いた。

「凄い…」

関係者席の一角――ステージの真正面に位置する場所で、Ｐｏｐｐｉｎ☒Ｐａｒｔｙの面々は驚きの声を漏らすばかりだった。

思い出すのはかつての自分達の主催ライブ。あの日も協力してくれたＲｏｓｅｌｉａは最高の音楽を奏でていたが、今目の前で奏でられているのはそれ以上のもの。

昔と比べて技術も格段に上昇しているし、演奏の端々に取り入れているパフォーマン

スも圧倒的に増えている。だがそれ以上に――全員が楽しそうに音楽を奏でていて、彼女達の絆の強さが感じられる。

「友希那先輩…楽しそう…！」

香澄が目を輝かせながら嬉しそうに呟く。かつてのＲｏｓｅｌｉａ崩壊の危機の際、迷いを抱えながら苦しんでいた友希那を見ている香澄からすれば、嬉しく思えるのは当然だ。

「頑張れ…友希那先輩…」

ステージ上で懸命に歌う友希那の姿を見ながら、香澄は祈るようにそう呟いた。

（――楽しい）

ステージ上で歌う私の胸中は、普段の私なら殆ど思わないであろう思いが溢れていた。歌詞の一つ一つを全力で――『楽しむ』ように歌うなんて事、昔の私では考えられなかった。

『――きっと、湊さんの気持ち次第ですよ。貴女がＲｏｓｅｌｉａに何を求めていたのか、自分のＲｏｓｅｌｉａに対する想いがどれくらいあるのか。それを皆に伝えれ

ば、きっとわかってくれます』

かつて、茜に言われた言葉を思い出す。かつてのＲｏｓｅｌｉａを取り戻そうと間違った道を選んでしまった私の浅はかな考えをそっと諭してくれた、彼女の言葉。昔の私には完全に理解出来たわけでは無かったけれど、今なら分かるかもしれない。

（今なら…きっと、自信を持って音楽を好きと言えるわね）

音楽に賭ける情熱は誰にも負けないと思っていたけれど、音楽が好きだと言う気持ちが私には無かったんだと…そう思った。

なら、今からでも遅くはない。この気持ちを大切にしながら、今のライブを全力で楽しもう。

「――――ッ！」

声を張り上げて、皆の演奏に負けないように歌い上げる。スポットライトが私達を照らす中、紗夜のギターが吠え、あこのドラムが奔り、燐子のキーボードが静かに音を奏で、リサのベースが寄り添うように音を紡いでくれる。

結成当初に比べて、すっかり頼もしくなったメンバーの音。全員が今、各々ができる最高のパフォーマンスを見せている。

なら私も――応えなくては。最高のパフォーマンスに相応しい最高の歌を、今この場で歌わなければならない。

――歌え。

（私の全てを…）

――歌え。

（私の想いを…）

――歌え！

（このライブで、教えてあげるわ！）

激しいシャウトと共に演奏が轟き、観客のボルテージが最高潮に達していく。天井知らずに大きくなっていく歓声を一身に受けながら、高らかに。私達の想いを、純度高い宝石に変えて――！

「…流石Ｒｏｓｅｌｉａ、と言うべきなのかな」

思わず感嘆の言葉が口をついて出る。それ程までに完成された演奏だった。紗夜姉さん達の演奏も2年前とは明らかに差があるし、演奏もしっかり纏まっている。

だが何よりも――湊さんの歌が凄まじい。仕事柄、今まで数多くの歌手の歌声を聴いてきたけれど、今の湊さんは文字通り次元が違った。声量も普段より多いようで、会場の端から端までしっかりと声が届いている。

『――――ッ！』

「凄い…まだ追いつけなさそうだね」

高校時代に交わした約束…と言うより宣誓と言った方が近いか。どうやらまだ、その宣誓は果たせそうにないらしい。

『――ありがとう』

どうやら、1曲目が終わったらしい。割れんばかりの拍手と歓声が会場を席巻し、それは地鳴りのような音となってこちらまで届いてくる。どうやら出だしは好調のようだ。

「…そろそろかな」

座っていた椅子から立ち上がり、傍に置いてあったギターを手に取る。長年連れ添ってきた相棒のネックを優しく撫でれば、菫色のボディが一瞬煌めいたように見えた。

「――ありがとう」

1曲目が終わり、若干のインターバルが入る。当然この後も曲は続くけれど、ここで行わなければならない準備はまだ終わっていないらしい。なら、段取りを少し調整していかなければならない。

「次の曲…といきたいところだけれど、その前にメンバー紹介よ。先ずはギター、氷川紗夜！」

瞬間、吠えるギター。エフェクターを介して吐き出された音色が会場を席巻し、観客のボルテージを否応なしに上昇させていく。

「次に…ベース、今井リサ！」

次なる呼びかけに応えたのはリサ。手に持っていたピックを観客へと投げるや否や、指弾きによる即興のメロディを奏でた。

「よろしくっ☆」

そう言ってウインクするリサに、会場からの歓声はさらに大きいものへと変化する。

その歓声を受けて、リサはニッコリと笑った。

「ドラム…宇田川あこ！」

瞬間、奔り抜けるドラムの音。すっかり成長したあこのスティック捌きは、もはや1人前を名乗れる域に達している。腕が霞んで見えるほどの速度でスネアやハイハットを叩いていき、最後はクラッシュとライトを鳴らして決めポーズを取った。

「キーボード、白金燐子！」

声と共に流れる、静かな旋律。水面に波紋が浮かぶように、聴く人に穏やかな印象を与える旋律を弾き終えた燐子はその場で静かに一礼した。

「そして――我らがリーダー、湊友希那！」

MCを交代したリサが高らかにその名を呼ぶと、会場のボルテージは更に上昇。観客の歓声をその身に受けながら、友希那はスカートの裾を摘んで優雅に一礼する。

「さて、次の曲だけれども――貴方達も知っている、ある人がゲストに来てくれているわ」

友希那の一言にざわめく会場。ざわめきの内容は殆どがどんなゲストが呼ばれたのかであるが、中にはゲストを呼んだというその事実に驚いている者もいた。普段のRo

ｓｅｌｉａのライブは他のバンドにゲストとして行くことはあれど、その逆は無かったのだ。驚く者がいるのもある意味当然の結果だった。

「私達の良きライバル――彼女と共に、今日のライブは進んでいくわ。皆、一瞬たりとも見放してはダメよ？」

そう言って静かに笑う友希那。普段はあまり人前で笑顔を見せない彼女だからこそ、その笑顔はとても輝いて見えるのだろう。

事実、隣のリサは胸を抑えて呻いているし、観客の何人かは気絶した人もいるほどだ。

「――友希那の純粋な笑顔…破壊力が…」

「…リサ？」

不思議そうに首を傾げる友希那と、呻くリサ。どこまでも脱線していきそうな流れを戻すために紗夜がパンパン、と両手を叩く。

「ほら、時間が押していますから早く次に行きましょう？」

「そうですよ！リサ姉もほら、早く元に戻ってー！」

「今井さんが…あこちゃんに、注意されてる…」

普段ならまず見れないであろう珍しい構図に、燐子が思わずといった風に呟く。しっかりしているリサであるが故に、いつも注意される側のあこが注意しているというのは中々新鮮に映るのだろう。

「…先に進めるわよ？」
「う、うん…大丈夫だよ、友希那」
「…兎も角、次の曲に行くわ。聴いて下さい、『Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ　Ｓｙｍｐｈｏｎｙ』」
曲名を言った途端に、会場が更なる歓声に包まれる。それもそのはず、『Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ　Ｓｙｍｐｈｏｎｙ』はＲｏｓｅｌｉａの曲の中でもかなりの人気を誇る曲だ。紗夜の圧倒的な演奏技術によって紡がれるギターの音色がメインとなる為、紗夜を推しているファンの間ではもはや神曲とまで言われるほど。
ステージ上の照明が落とされ、会場は観客の持つブレードの光のみが存在する暗闇へと変化する。
誰も、何も動かない。会場を静寂が満たし、観客間の緊張が極限まで高まっていく。
そして――
特徴的なギターの音色と共に、引き絞られたアイスグリーンの光がスポットライトの様にギターを弾く少女へと降り注ぎ、その光に照らされた少女――紗夜は抑え込んでいた情熱を解き放つように、ギターの音色を響かせる。
過去にライブで何度も通った流れ。今回もその例に漏れず、このまま続くと思われた…が。

紗夜のギターから迸る音色にもうひとつ、ギターの音色が重なる。その音色は紗夜の情熱的な音色とは対称的に、水面に揺蕩う木の葉の様な静かな音色で、会場を静寂に包み込む。

そして――紗夜のスポットライトとは真反対に位置するスポットライトがもうひとつ点灯し、先程までステージにいなかったはずの存在を照らし出す。紗夜と同じくらいの長さの髪をポニーテールで纏め、夕焼けを連想させるオレンジ色のパーカーを羽織った少女――茜は僅かに紗夜とアイコンタクトを交わすと、そのままステージ中央、友希那の立つ場所へと歩いていく。

誰も予想し得なかった結末に、会場は大いに沸き上がり、大歓声が会場中を反響していく。その中で、友希那が叫んだ。

「彼女こそが今回のゲスト…氷川茜！今日は彼女と私達Ｒｏｓｅｌｉａで、最高のライブにすると誓うわ！」